史跡松本城南外堀跡第7次・西外堀跡第6次発掘調査

現地説明会資料　令和7年1月26日（日）　　松本市教育委員会文化財課

1　調査の概要

⑴　遺跡の所在　　松本市大手3丁目3－84他

⑵　調査の目的　　松本城南・西外堀復元事業に伴う南・西外堀跡の確認調査

⑶　調査期間　　令和6年（2024）5月　～　令和7年（2025）3月（予定）

⑷　調査区　　9か所　約400㎡

①

2　南・西外堀について

松本城は本丸・二の丸・三の丸と、それぞれを囲む内堀・外堀・総堀の3重の堀を設けた城郭部分及び城下町で構成される近世城郭です。外堀の明確な成立時期は不明ですが、築城期に合わせて整備されたものと考えられます。江戸時代をとおして浚渫（泥さらい）が行われたことが古文書等からわかっており、松本城の泥が新潟の海を汚したとも伝わっています。明治維新以降、松本城が政庁・軍事的拠点としての役目を終える中で、南・西外堀部分は大正8年から昭和初年にかけて埋め立てられ、宅地化されました。

平成8年度以降、発掘調査による堀の位置の確定を進め、平成24年度から順次国史跡追加指定を図っており、現在は埋め立てられた南・西外堀の復元整備に取り組んでいます。これまでの整備に伴う発掘調査において、二の丸公園内で土塁の盛土、外堀二の丸側で杭列、三の丸側で石垣を確認しています。今年度の調査は、南・西外堀の平面・断面形状、南隅櫓遺構・水門遺構、腰巻石垣・木杭列の有無を確認するためのものです。

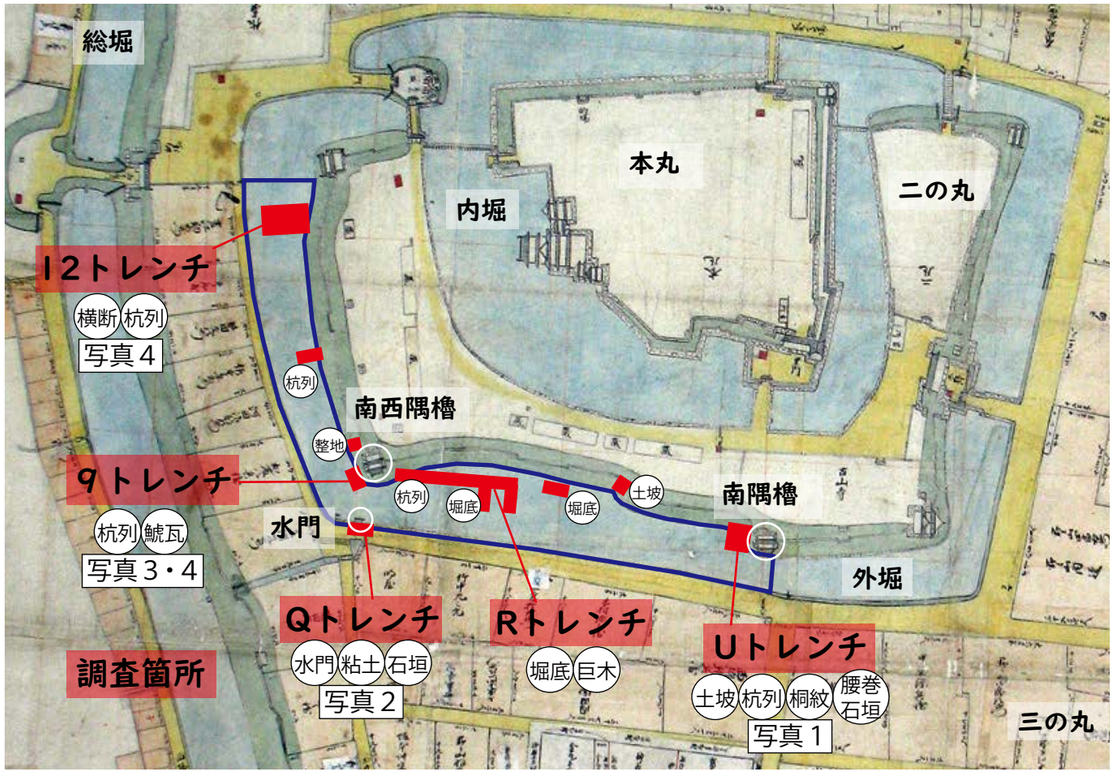


図1　調査区の位置と調査成果を「享保十三年秋改松本城下絵図」に重ねて表示

：松本城南・西外堀復元事業範囲

3　発掘調査の成果

⑴　腰巻石垣の出土（Ｕトレンチ）

南隅櫓周辺の二の丸土塁裾部に設置された腰巻石垣が出土しました（図1：腰巻石垣）。絵図では、南隅櫓～太鼓門～東北隅櫓まで腰巻石垣が描かれており、昭和54年の東外堀の調査に次いで2か所目の腰巻石垣が出土し、外堀の平面形状を確認しました。

根石は少し前に張り出す「あごだし」の工法が用いられていると推測します。また、天守台石垣などで見られる自然石を積む野面積みではなく、加工痕のある石材を用いているため、天守台石垣より時代新しい可能性があります。

⑵　水門遺構・石垣の出土（Ｑトレンチ）

外堀の三の丸側には過去の調査や絵図から石垣があったことがわかっています。今回の調査では外堀の南西部で石垣が出土しました（図1：石垣）。

また、石垣の東側に広がる粘土（図1：粘土）や、ホゾのある丸太、その丸太に接する板が出土しました。これは絵図に描かれている水門に関係する遺構であると考えられます（図1：水門）。

⑶　木杭列の出土

5か所の調査区から二の丸土坡裾部に設置された木杭列が出土しました（図1：杭列）。その位置から二の丸側の外堀平面形状を確認しました。これまで出土した木杭列はすべて同じ標高で出土しています。これは南・西外堀が同じ水面を持っていたことを表しています。

また、木杭列の出土状況から推定される二の丸の形状は絵図に描かれている二の丸の形状と一致しており、絵図がとても正確であることがわかります。

⑷　隅櫓の痕跡（Ｕトレンチ・9トレンチ）

南隅櫓と南西隅櫓の周辺を調査しました。隅櫓を直接的に示す遺構は見つかっていませんが、隅櫓で用いられていたと考えられる遺物として、9トレンチからは石垣の用材と思われる石材や、鯱（しゃち）瓦が出土しました。Ｕトレンチからは建設当初のものと考えられる巴紋や五七桐紋を含む大量の瓦が見つかりました（図1：鯱瓦・桐紋）。

【写真1】Ｕトレンチ　腰巻石垣

【写真2】Ｑトレンチ　門遺構

【写真3】9トレンチ　木杭列と石垣用材

【写真4】9トレンチ　鯱瓦

⑸　西外堀で２度目の横断調査（１２トレンチ）

令和5年度に引き続き西外堀で2度目の横断面を確認するための調査を行いました（図1：横断）。その結果、昨年度と同様な形状であるおおよそ箱堀であることがわかりました。平らな堀底から緩やかに立ち上がり、水面近くに向けて傾斜を増します。水際には木杭列が打ち込まれ、木杭列に沿ってテラス状になっています。木杭列の裏は円礫を設置し、その上に土を盛った土坡裾部の様子が確認できました。

この調査区の木杭列は土坡との間に板を設けてあり、円礫の固定や木杭列の方向を指示する役割などが考えられます。

堀の水深は深いところで 2.5 m程度と見られ、堀底付近からは「天聖元宝」という北宋銭も出土しています。厚さ1.5 m以上の堆積物がたまっており、埋立てられる直前は浅かったことがわかります。

この調査区は木杭列の残存状態が良く、①堀底に近い所には細く短い先の良く尖った木杭、②その奥には一回り太く尖った木杭、③さらに奥には径の大きな木杭の大きく三種類に分類ができます。これらの木杭は防御や土留め、護岸などいくつかの役割を持っていたと考えられます。また、木杭列の並ぶ向きに注目すると南から北に向かって、東に湾曲しています。絵図も同様に西外堀が北西隅櫓に近づくほど堀幅が広くなっており、調査成果と絵図の記載が対応しています。

⑹　フォトグラメトリー

令和6年度から調査の記録に、写真を用いた三次元測量（フォトグラメトリー）を取り入れています。数百枚の写真から精細な三次元データを作成し、図面にするものです（図2）。

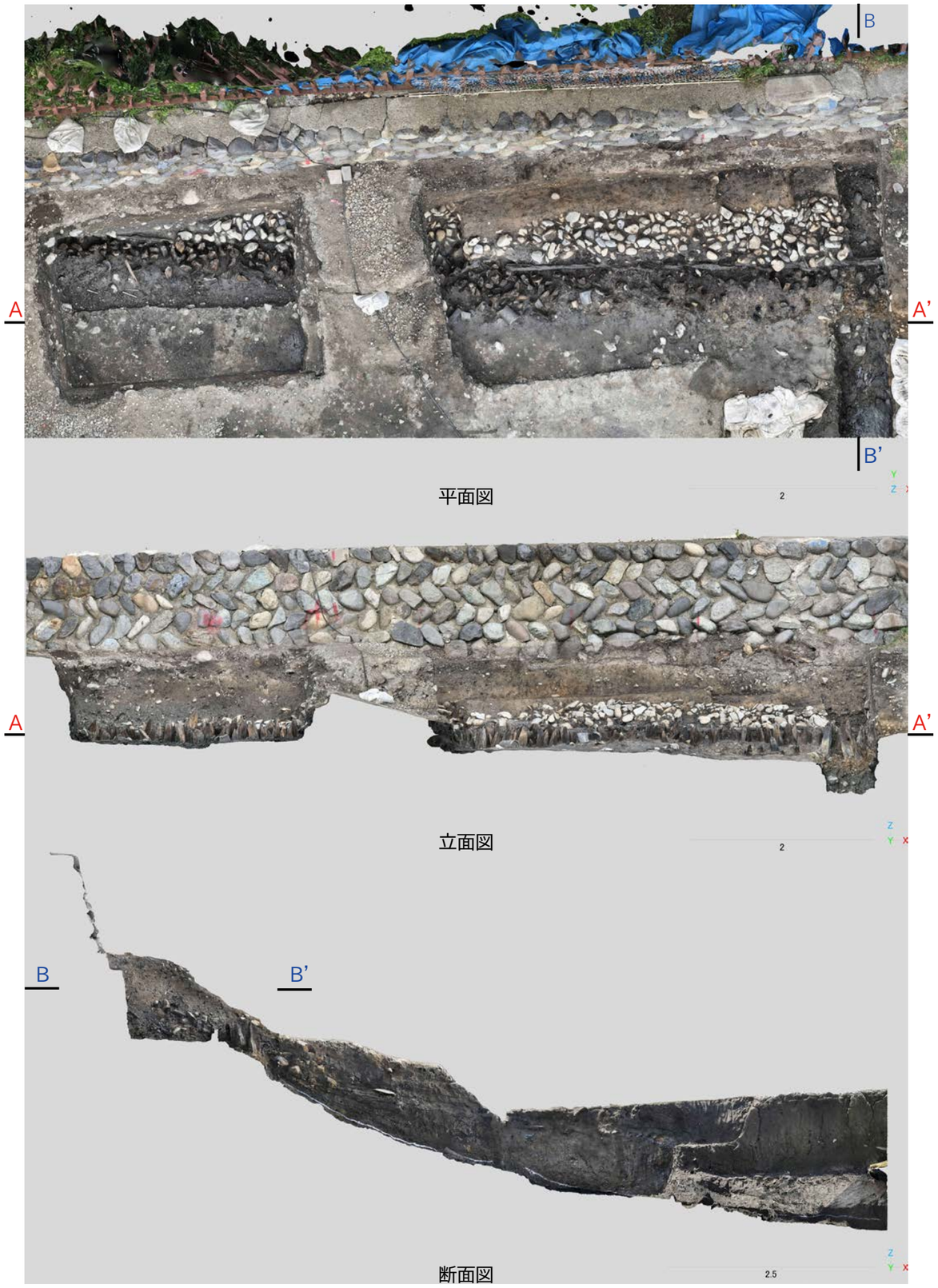
これまでは手作業で図面を作成していましたが、写真であれば素早く記録することができ、作業の安全や遺構の保護にもつながります。また、正確で色調のわかる臨場感のある図面をどのような場所でも記録することができます。臨場感のあるデータで、出土状況をより実感できることも特徴です。現在は手書きとフォトグラメトリーの両方を使い、測量図を作成しています。

【写真５】 12 トレンチ　全景　手前が二の丸側

【写真6】 木杭列　左手が二の丸側

【写真7】 木杭列・板・円礫　右が二の丸側

【写真 8】 木杭列・板・円礫　手前が二の丸側



【図2】 フォトグラメトリーで作成した12トレンチの測量図面